
コフートを読む

アレクサンダー M. シーゲル 著、岡 秀樹 訳

金剛出版 (2016) 317頁 価格5400円 (税込)

本書は、世代的にはH. コフートの孫弟子にあたるA. M. シーゲルが、難解と評される「コフト理論」(自己心理学)の成立から発展(精神分析学会から受けた批判も含めて)に至るまでをまとめた学術書である。原題はHeinz Kohut and the Psychology of the Self (Routledge 1996)である。原題にあるように本書は自己心理学についてのみ紹介されている著書ではなく、自己心理学の発展を生涯のライフワークとしていたコフトそのものについても並行して詳述された著書である。この点で、原本はコフトの伝記としても先駆的な著書であったと言えよう。

本書の冒頭、第1章では、コフトの盟友E. S. ウルフがシカゴでのコフトとの出会いから始まるエッセイ「ウィーンからシカゴへーコフト小伝」を寄せている。それを読むと、コフトと交流が深かったウルフならではのコフトの伝記に触れられる。たとえば秘密主義でワイン好き、シカゴ交響楽団の演奏会やオペラに親しむ音楽愛好家など、パーソナルなコフトの人柄などもうかがい知れて面白い。

日本語訳者である岡秀樹(疋田病院)は精神分析家であり、日本を代表する自己心理学者である。福岡で「コフト研究会」の代表を長く

務めているだけあって、コフト理論の翻訳にも手慣れている読みやすい。また、本書に挿入されている図表を含めて、コフト理論の訳語の細部に至るまでの丁寧なこだわりと情熱が感じられる翻訳となっている。

さて、本書で取り上げられているコフトは精神科医であり、精神分析家である。オーストリアからナチスの迫害を逃れてアメリカに渡って、才能が開花している。アメリカ精神分析学会会長や国際精神分析学会副会長の要職にも就いており、国際的に精神分析学会をリードする精神分析家の一人でもあった。

本書では序盤の第2章にて、初期のコフトがS. フロイトの忠実な生徒として、すなわち「ミスター精神分析」としてシカゴ精神分析研究所で講義をしていた珍しい記録が載せられている。続く本編では、コフト3部作『自己の分析』、『自己の修復』、『自己の治癒』が中心に据えられ解説されており、フロイトの流れを汲む精神分析を基盤としながらもコフト理論がどのように創造され、発展していったのか、読者はコフトの思索を辿りながら理解できる構成となっている。なお、本書ではコフトが書いた図表に加えて、コフトの原文や臨床例も多数引用されており、優れた解説書となってい

* 福岡県立大学人間社会学部・講師

る。

『自己の分析』を解説した第5章、第6章では、理想化された親イマージと誇大自己についてのコフートの概念と、これらの布置が治療場面の中で活気づくときに生じる臨床的現象、すなわち転移の扱いについて紹介されている。発達の連続体における外傷のもたらす結果と「最適な欲求不満」の論述が秀逸である。

『自己の修復』を解説した第7章、第8章では、57歳で白血病に罹患したことをコフートが知った後の、執筆への情熱と集中力、伝統的精神分析に遠慮していた物言いからふっきれた様子が読み取れる。たとえば自我心理学と自己心理学を区別して、「体験から遠い理論（抽象的・先入観的）」と「体験に近い理論（観察）」、「罪の人（自我心理学）」と「悲劇の人（自己心理学）」などが対比的に論じられている。また、観察者による被観察者の影響を考慮する、間主観的立場からの科学的客観性への批判も鋭い。

『自己の修復』と『自己の治癒』を挟む間の第9章ではコフートの有名な症例、「症例Z」が紹介されている。本書では触れられていないが、一節では症例Zはコフート自身であったことが言われている。ここでは、症例Zに対してコフートが行なった2種類の分析、すなわち1度目の分析として、母親を巡る父親とのエディプス葛藤を中心とした「古典的力動—構造論」からの理解と、続く2度目の分析として、症例Zを熱愛し病的に隷属を強いる母親からの心理的解放の理解、そして強い父親を求める理想化転移の理解といった、「自己心理学」からの分析が解説されている。症例Zに行なった自己心理学からの理解による分析が成功を収めたことにより、コフートの最後の著作『自己の治癒』のための作業に着手した経緯も理解しやすく、

第9章が巧い布石となり、第10章、第11章『自己の治癒』へとコフートの思索が繋がっている。

フロイトとコフートとの決定的な理論の違いの一つは、自己愛の発達ラインに環境因（主として養育者のパーソナリティからの影響）を中心に据えているかどうかであろう。シーゲルは本書の中で、「フロイトは、環境を、それがほとんど幼児の心に影響を与えないかのようにみなした。しかしコフートとザイツは、環境は発達中の心に重大な影響を与えるものであると示唆し、環境の影響—それは両親のパーソナリティを介して伝えられる—を論じている pp.84」と述べている。このコフートの発達ラインは、コフートと同時期に活躍していた英国独立学派で小児科医のD. W. ウィニコットとも共通する視点であろう。すなわち、自我心理学における「欲動—葛藤モデル」から、「自己愛—成長（発達）モデル」を中心に据えた、「自己の発達論」の誕生である。またこのモデルは、後にポスト・コフートとして、現代、二者心理学的視点を明確に定式化している、R. D. ストロウらの間主観性理論にも繋がっていく重要な視点と思われる。

素晴らしく実践的で有用な理論を世に送り出したコフートであったが、本書でコフートの思索を辿っていくと、読者は創造者としてのコフートの苦悩と孤独も同時に感じられることであろう。本書の最終章（第12章）「最後の言葉—共感をめぐる思索」は、カリフォルニアのバークレーで開かれた第5回自己心理学会年次大会でコフートが行った講演、「共感について」（1981）で閉められている。この頃になると、「愛情を通じて、共感が患者を癒す（コフートの立場とまったく異なる）」と主張する者た

ちによって、共感概念が誤って乱用されることに、コフォートがひどく心を痛めていたことがシーゲルによって記述されている。コフォートの述べる「内省と共感」とは、患者の心を科学的、探索的に理解していくための方法であったことを本書は繰り返し強調する。共感がいわゆる今日的な科学的手法とみなせるかどうかは率直に述べると難しいところであるが、少なくともコフォートの述べる共感、感傷的なものでも安直な癒しでもない。コフォートは温かい共感的応答性の重要性を強調しているが、分析的体験の中核は「再構成—解釈的なアプローチ」であったことが理解できる。

本書では、『自己の修復』で述べられたコフォートの言葉を次のように引用している。「科学者は、自分が成し遂げたことの不備（定式化の仮説的性質や概念の不完全さ）に耐えることができる（中略）それどころか、そうした科学者は、それらの不備を、さらなる楽しい探求の旅へといざなう刺激として大切にする。・・・確立された説明体系を崇拝するような態度は、・・・科学の歴史において呪縛になる。p.191」コフォートが極めて常識的な科学的姿勢を保持していたことがうかがえる一節である。

コフォートはフロイトの自我心理学の流れを守る保守的な精神分析を「古典的精神分析 classical psychoanalysis」と称している。この呼び方には、これまでの精神分析を「古くさいもの」と考えるコフォートの批判精神や皮肉がもちろん含まれていると思われる。しかし他方では、コフォートがold（古い）ではなくclassical（古典的）の形容詞を用いたところを見ると、単なる批判だけではないコフォートのアンビバレンスが滲み出ているように筆者には思われてきた。

つまり、音楽の都ウィーンで生まれ、ウィーンで育ったコフォートにとって、またウルフが第1章でコフォートの小伝でも寄せたように、シカゴ交響楽団のクラシック音楽を愛好していたコフォートにとっては、classical（古典的）は必ずしも「古くさいもの」として切って捨てる類のものではなく、むしろ伝統への尊敬の念や愛着も無意識的に含まれていたのではないだろうか。英語でclassicには、芸術として「一流の」「最高水準の」という意味も含まれる。この意味でも、厳しい批判や冷遇に晒されながらも生涯精神分析家であり続け、あくまでも精神分析を科学的・臨床実践的に発展させるための発達促進的な「自己心理学」を創造し、その価値を訴え、伝統の中でもがき戦い続けた創造者としてのコフォートに、本書で出会えることであろう。